

## 産婦の心理状態に関する研究

### (1) 母乳不足の主観的判断について

研究第2部 斎藤幸子

共同研究者 研究第1部 千賀悠子  
特別研究員 宮崎 叶

#### I 研究目的

妊娠から出産・産褥期にかけては、女性にとって心身ともに大きな変化が起こる時期である。この変化は歓びである一方、負担を感じたり、不安に陥ったり、特に産褥期はマタニティーブルーに代表されるように精神的に不安定になるものが少なくない。また、育児という新しい仕事が始まる時期でもあり、分娩直後の母親の心の状態は、様々な感情が起きていることが想像される。

本研究の第一の目的は分娩直後の産婦の心の状態を知ることであるが、これには様々な要因が影響すると思われる。その要因として①出生した児および本人の健康状態②産褥ケアの状況、③個々を取り巻く家庭および社会環境④本人の性格傾向を想定した。これらを総合的に把握し、分娩直後の母親の心の状態との関連を知ろうとした。さらにこの産褥期の心の状態が育児行動にどのような影響を及ぼすものであるかについても検討し、母性研究の一端としたい。

従来の研究から明らかにされている<sup>1)2)</sup>育児不安の代表は授乳に関する問題である。今回の報告は「母乳が足りていると思うかどうか」の産婦の主観的判断と産褥入院中の環境条件や心の状態との関連をみた。同時にこの判断が実際の母乳栄養の確立にも関連があるかについて、その後の栄養方法を追跡調査した。

#### II 研究方法

出産時から産褥入院中に起きる様々な感情の状態を知ることが目的としたアンケートを郵送により行なった。対象は1987年10月から1988年2月愛育病院において出産した母親約400名。回答は230名からあった。

児及び母の健康状態は分娩カルテ、新生児カルテ、保健指導カルテから資料を得た。その結果、今回分析の対象としたのは、初産、妊娠週数37週以上の生産で、入院中母乳の直接授乳を妨げる要因が母子双方になかった

118例である。

この118例について入院中「母乳が足りていた」と感じていたかどうか本人の主観的判断によって2グループに分け分析を行なった。主観的判断によった理由は実際はどうあれ本人がどう感じていたかの心の状態をポイントにしたためである。

#### III 調査内容<アンケート項目>

1. 陣痛から出産直後までに生じた気持ち・感情
2. 初めて乳房を含ませた時期
3. 母子同室の経験の有無
4. 授乳した部屋の印象(授乳室・個室)
5. 赤ちゃんの吸い方
6. 母乳は足りていたと思うか
7. 入院中の授乳に関する指導・ケアについて
8. 母乳に関する質問・相談の有無と医療側の対応
9. 前問7.8.に対する印象
10. 母乳以外の心配ごとの有無
11. 母体の回復に関する受け止め方
12. 退院後1ヶ月までの栄養法選択の意識
13. 退院後の生活における心配ごとの有無
14. 病院全体に関する印象
15. 入院中に赤ちゃんを過ごして生じた気持ち・感情
16. 入院中に生じた感情・気持ち(前問以外について)
17. 出産後自分自身をどのように思っていたか

#### V 結果

対象118例中、本人の主観的判断による母乳の過不足は、「足りていたと思う」63例、「足りていなかったと思う」55例であった。以下前者を「充足群」後者を「不足群」と称し比較を行なうこととする。

始めに実際の母乳分泌の状況であるが、新生児カルテから参考になる項目を調べた結果、児の体重減少率では

10%未満が充足群58例(92.1%)不足群48例(87.3%)  
10%以上は充足群2(3%)不足群4例(7.2%)で有意な差はなかった。体重増加開始日では3日目以前が充足群21例(33.3%)不足群では6例(10.9%)、7日目以降は不足群に10例(18.2%)充足群3例(4.8%)であったが、有意な差はなかった。

なお出生時の平均体重は充足群3.045g、不足群3.023gであった。母の平均年齢は充足群28.2歳、不足群29.5歳。夫立ち合い分娩をしたものは充足群18例(28.1%)、不足群15例(27.3%)であった。

## 1 入院中の諸経験との関連

### ①はじめて乳房を含ませた時期

「初回の授乳時」が充足群51(81.0%)、不足群43(78.2%)と多くを占め差はなかった。愛育病院産科における初回授乳は分娩後8時間経過後の歩行開始以降、授乳室にて行なわれる。分娩直後に含ませたのは充足群の3例(4.8%)のみで、不足群には見られなかった。

### ②母子同室の経験

「同室した」は充足群31(49.2%)、不足群26(47.2%)と経験の有無では差はなかった。しかし、「同室開始時期」では表1の通り有意な差が見られ、充足群は分娩後平均4.19日目に開始、不足群は分娩後平均5.48日目に開始と、充足群の方が不足群より早い時期に同室を開始していた。

「同室をしなかった理由」では有意な差はなかったが、「ひとりで休みたかった」が充足群19(59.4%)に対し不足群23(79.2%)と不足群にやや多い割合で見られた。

### ③授乳室について

「授乳室での授乳はよかった」としたものは両群とも87.3%で差はなかった。「よかった」と「いやだった」の両方を挙げたのは充足群8(12.7%)不足群4(7.3%)で、「いやだった」は不足群の3(5.5%)のみであった。

### ④授乳に関して受けた指導やケア

入院中に受けた指導やケアの内容には両群間でほとんど差がなかったが、受け止め方に一部差が見られた。表2に示したように、不足群では「母乳の出方には個人差がある」との指導を受けても不安感がとれなかったものが、充足群の5.6%に比べ45.2%と有意に多い。

同じく表3は「吸わせていると段々出てくる」との指導を受けても不安であったものが充足群4.1%に比べ33.

表1 母子同室開始日

	2日	3日	4日	5日	6日	7~	計
充足群	4	6	8	9	1	3	31
不足群	—	3	2	7	6	7	25

$T=3.4639(p<0.01)$

表2 「母乳の出方には個人差がある」に対して(%)

	安心した	不安だった	計
充足群	34(94.4)	2(5.6)	36(100)
不足群	23(54.8)	19(45.2)	42(100)

$\chi=15.51(p<0.005)$

表3 「吸わせていると段々出てくる」に対して(%)

	安心した	不安だった	計
充足群	47(95.9)	2(4.1)	49(100)
不足群	32(66.7)	16(33.3)	48(100)

$\chi=13.73(p<0.005)$

表4 赤ちゃんの吸い方 (%)

	よく吸っていた	段々うまくなかった	よく吸えなかった	計
充足群	33(52.4)	28(44.4)	2(3.2)	63(100)
不足群	23(41.8)	17(30.9)	15(27.3)	55(100)

$\chi=13.94(p<0.005)$

3%と有意に多い。

指導やケアに対する評価では、「よかった」が充足群87.3%、不足群78.2%で差はなく、ほぼ満足していた。

### ⑤赤ちゃんの吸い方

表4に示した通り、「うまくいかなかったと思う」が充足群2(3.2%)に対し、充足群が15(27.3%)と多く有意に差が見られた。これに対しカルテで調べると吸い付き不良は不足群の1例のみでその他は良であった。

## 2 入院中に感じた心配ごと

### ①母乳に関する心配ごと

母乳に関する質問や相談をしたものは充足群31(49.2%)に対し、不足群47(85.5%)と不足群に質問・相談が多かった。

質問や相談に対する医師や看護婦の対応をどう受け止めたかでは、「内容をよく把握してくれた」と感じたも

のが充足群22 (71.0%) 不足群26 (54.2%)。「気持ちをよく把握してくれた」と感じたものが充足群21 (67.7%) 不足群26 (54.2%)であった。「どちらかという把握してくれた」を含めると、内容の把握では充足群96.8%、不足群91.7%、気持ちの把握でも充足群93.5%、不足群83.4%とほぼ満足していた。

#### ②母乳以外の心配ごとの有無

「心配ごとあり」は充足群36 (57.1%) 不足群35 (63.6%)と心配ごとの有無では有意差はなかった。

心配ごとの内容は「自身のこと」が充足群22 (34.9%) 不足群 (29.1%)、「赤ちゃんのこと」は充足群16 (25.4%) 不足群14 (25.5%)であった。

#### ③産後の回復について

「つらかった」と感じている割合は充足群53.4% 不足群38.2%と充足群の方が多いが有意差はなかった。

つらかった内容では「身体的なこと」は両群ともつらかったとしたもののほぼ全員が挙げていた。「精神的なこと」は充足群7(11.5%) 不足群9(16.4%)と差が見られなかった。

#### ④退院後の心配ごと

「退院後の心配ごとあり」は充足群74.6% 不足群80.0%で差がなく両群とも心配ごとありの頻度は高かった。心配ごとの内容は「赤ちゃんのこと」は充足群34 (54.0%) 不足群30(54.5%)、「自分のこと」は充足群22 (34.9%) 不足群28 (50.9%)であった。

### 3 出産後入院中に生じた気持ち・感情 (5段階評価)

「出産後の自分に対する (母として、妻として) 評価」では、表5のごとく、充足群ではSELF ESTEEMの各項目での平均得点が高い傾向があった。

「赤ちゃんと過ごしている時の気持ち・感情」では充足群はプラスの感情・気持ちの項目で平均得点が高い傾向があった。(うれしさ、よろこび、愛情を感じた、気持ちが和んだ、充実した感じ、豊かさ、誇らしさ、イライラしない、穏やかさ、楽しさ、の得点) これに対し不足群ではマイナスの感情・気持ちの項目で平均得点が高い傾向があった。(辛さ、重荷に感じる、疲れを感じる不安だった)

### 4 赤ちゃんの栄養法に関する意識と実際

表5 出産後、自分自身をどう思っていたか

	充足群	不足群
強い	3.3	3.0
忍耐強い	3.3	2.9
自分に満足している	3.5	3.3
暖かい	3.6	3.3
好ましい人間だと思っている	3.4	3.2
自慢できるようなものはない	2.5	2.7
長所がたくさんある	3.1	2.9
だめな人間だと思ふことがある	3.0	3.3
感受性が豊かだ	4.2	3.8
決断力がある	3.3	3.1
行動力がある	3.4	3.1
美しい	2.8	2.6
しなやかだ	2.8	2.5
輝いている	3.3	3.0

#### ①生後1ヶ月までの栄養法はどうするか

充足群は「自分の意志で絶対母乳だけで」が52.4%と最も多く、不足群は「あまりでないので混合に」が32.7%と最も多い。「なるべく母乳で」「指導された通り母乳で」を含めた母乳指向の合計は充足群54 (85.7%)、不足群33 (60.0%)であった。

#### ②生後1ヶ月時の栄養法の実際

生後1ヶ月健診時の栄養法は充足群が母乳41 (65.1%) 混合21 (33.3%) 人工1 (1.6%)、不足群は母乳20 (36.4%) 混合30 (54.5%) 人工3 (5.5%)で有意な差が見られた。

混合栄養・人工栄養にした理由は「自己判断による母乳不足」がもっとも多く充足群の13例 (20.3%)、不足群の15例 (27.3%)であった。「母乳不足で指導を受けた」は充足群では1例 (1.6%)のみであったが、不足群には10例 (18.2%)見られた。

#### ③生後3ヶ月時の栄養法の実際

生後3ヶ月健診時の栄養法は充足群が母乳32 (50.7%) 混合19 (30.1%) 人工6 (9.5%)、不足群は母乳19 (34.5%) 混合20 (36.4%) 人工11 (20.0%)で依然充足群の母乳栄養率が高いが、有意差はなくなっていた。

混合栄養・人工栄養にした理由は「自己判断による母乳不足」がもっとも多く充足群の16例 (25.0%)、不足

群の12例(21.8%)であった。「母乳不足との指導を受けた」は充足群では1例(1.6%)のみであったが、不足群には11例(20.0%)見られた。

## V 考察

まず母乳が足りていたかどうかの褥婦の主観的判断が実際の母乳分泌とどの程度一致しているかであるが、入院中の体重減少率や体重増加開始日、その後の母乳栄養率から見れば、やや充足群の分泌が良いようであった。しかし入院中、体重の変化から見て同じと思われる状態でも褥婦の受け止め方で、足りないと思っているものと足りていると思っているものに別れることが分かった。この主観的判断の違いの原因を調査結果から考察したい。

### 1 入院中の諸経験

母子同室の開始日は充足群が不足群に比べ早い結果が得られた。母子同室はいわゆる自律授乳ができ、別室の場合は規則授乳である。母乳の確立には生後早い時期から繰り返し吸わせることが有効であることは諸氏の<sup>3,4)</sup>の指摘するところである。母子同室をより早く開始することは、足りているという主観的判断を得ることを助けると考えられる。

施設側から受けた指導・ケアの内容は両群に差がなく同じ程度受けており、指導・ケアに対する評価では両群ともほぼ満足していた。しかし指導に満足はしていても不安感が消えない点では明らかに差がみられた。すなわち「母乳の出方には個人差がある」「吸わせていると段々出てくる」との指導を受けても不足群では不安の消えない者が充足群に比べ有意に多かった。

以上から母乳が足りないのではないかと不安感を除くためには言葉による助言のみならず、母子同室などより積極的手段が有効ではないかと思われた。

### 2 入院中の心配ごと

母乳以外の心配ごとで、自分のこと、赤ちゃんのこと、退院後の心配ごとなどいずれも両群間に有意な差は見られず、心配ごとの有無と入院中の母乳が足りているかどうかの主観的判断とは直接的な関連は得られなかった。しかしこれらの心配ごとの頻度は高く、両群とも各項目60%から80%にも達することから、褥婦は様々な事柄の精神的負担を負っていることの方が分かる結果であった。

### 3 気持ち・感情

プラスの感情の項目において充足群の平均得点が高い

傾向があった。心配ごとの有無において両群に差が見られなかったことから、心配ごとを受け止める心の状態の違いが、母乳の過不足の主観的判断に影響することが考えられた。詳しい分析は第2報において報告する。

### 4 退院後の栄養法

退院後の栄養方法の選択には入院中の母乳の過不足の主観的判断が影響し、母乳を希望していたものは充足群に多かった。そして1ヶ月時点では充足群の母乳栄養率が有意に高かった。しかし3ヶ月時点では有意差がなくなっていた。以上から1ヶ月まで母乳栄養を継続するためには、入院中ある程度の自信をつけることが有効と思われる。3ヶ月時点での自己判断による混合・人工栄養への移行についてははまた新たな要因が考えられよう。

## VI 結論

産褥入院中に母乳が足りているかどうかの主観的判断は、1ヶ月までの母乳志向および母乳栄養確立に関連がみられたので、足りないと思っている人に対しては入院中にある程度の自信をつけさせることが大切である。

そのためには助言だけではなく、分娩後早い時期から母子同室を開始するなどより積極的な経験をさせることが有効と思われた。

心配ごとの有無と過不足の主観的判断については関連がなかったが、心配事の頻度は高く褥婦の精神的負担の多いことが分かった。従って多くの心配ごとに対して褥婦がどう対処できるかが産褥期の精神衛生のポイントとなろう。その点入院中の心の状態の評価で、母乳が足りていると思っているグループのプラスの感情の項目の平均得点が高かったことが興味深い。冒頭にあげた要因のうち褥婦のもつ性格傾向を考慮することの重要性が感じられる。この項目について今後さらに分析を試みたい。

## 文 献

- 1) 斉藤幸子、他：総合母子保健センター保健指導部における赤ちゃんの栄養法、養護法のアンケート調査結果、日本総合養育研究所紀要第22集、1986。
- 2) 高野 陽、他：育児ノイローゼ、有斐閣、1982。
- 3) 山本高次郎：母乳、岩波書店、1983。
- 4) 平山宗宏、他編：母乳哺育。メディカルサイエンス社、1983